

馬の道具で働いた男

四十年ばかり前に亡くなった早川定平という男は、何事も我慢なこと（大きいとか、恐ろしいとか言うような意味）が好きで、あるとき、村で橋普請をするとき、二丈に余る巨大な橋桁の谷に落ちかけたのを、俺一人で上から支えているから、ものどもは全部下の谷へ廻れと言って頑張ったなどと言います。また若い頃、材木商の元締（代人のこと）をしていたとき、五月、百姓の忙しい時期に川狩りの人夫を集めに廻ったところが、一人も応じるものがないのに業を煮やして、最後、村の山口豊作という男を頼みにゆくと、これも家内中麦敲きの最中なので、断られて、その妻を敲くのに何ほどの時間がかかるかと訊いて、そんなものは俺が一人で敲いてやるというて敲き台の前に立って、次から次へ、まるで阿修羅の荒れるように、滅多矢鱈に敲いて、僅か半時ばかりの間に、家内中が全一日かかる麦を敲き落としてしまって、さあ、行ってくれと言って、連れて行ったと言います。



仙波穀機

江戸時代中期に発明された脱穀機。支えをつけて立てた多数の歯の間に稲穂を差し込み、籾殻を取った。それまでの竹箆で穂首を挟んで脱穀するやり方より数倍能率が良くなり、当時亭主を失った女性の雇われ仕事とされていた脱穀作業がなくなると云うことで、「ゴゲゴロシ」・「ゴゲダオシ」と呼ばれた農機具。

その豊作という男の話でしたが、普通の男が一度に麦束を二把ずつ持って敲くのに、一度に五、六把も抱えて、次から次へ敲きまくるので、あたりへ近寄れなかったばかりか、その妻の跳ね飛んだ一粒が、あっけにと取られて見ている足へ当たったのが、肉へめりこむように痛かったそうです。後に残った麦藁は、目茶目茶になって、何の役にも立たなかったということでした。

また、この男が秋田圃に麦を播くとき、稲株の土を万鋤で振り落とすのに、普通の万鋤では充分な力が出せぬと言って、五月田植に、馬に植代を搔かせる万鋤を持って、振り回したそうですが、その万鋤の先にかかって跳ね飛ばされた稲株の一つが、傍らに働いていたその男の母の横腹を打って、そのために母は一時気絶したということです。

動いた位牌

この男に弟が一人あって、その兄弟仲の悪かったことはまた特別で、隣り合
って家を持ちながら、ただの一日でも喧嘩の絶えた日はなかったと言います。

この我慢な男も病気には勝てなかったと見えて、四十を一期として亡くなっ
たと言いますが、死ぬ一日前まで兄弟喧嘩は続いたと言いました。その後、あ
とに残った弟がつくづく兄弟不和のあさましかったことを考えて、思い立っ
て、兄の位牌に向かって念仏を唱えると、感応あってか位牌ががたがたと、動
いたと言います。その男は七十余歳になって現存していて、この話をしました
が、先代は今一倍我慢な人だったそうです。